

廃墟と幽霊に見る建築の何か

Something of Architecture That Can Be Seen Through Ruins and Ghosts

金菱清

Kiyoshi Kanebishi

東北学院大学教養学部地域構想学科教授／
1975年生まれ。関西学院大学卒業。同大
学院修了。博士(社会学)。災害社会学。『生
きられた法の社会学』(日本社会学会奨励
賞受賞)、『3.11 働きの記録』(出版社会新
聞社会学文化賞受賞)、『呼び覚まされる靈
性の震災学』『震災学入門』『悲愛』ほか。

7階はなぜ撤去されることになっただのか

「広報紙などでご存知かと思いますが、このたび、度重なる事件・事故の根本原因を断ち切るべく、この町から七階を撤去することになりました」。

突如市職員から住民が宣告を受ける。7階の撤去後、本来7階の場所に8階を持って来る。なぜ7階か。人口当たりの事件・事故の7階での発生率が、全国平均の2.5倍にのぼることから、7階を撤去すれば、犯罪の温床を取り除けるとの発想に基づく。

7階の居住者は、権利や尊厳を踏みにじられたとばかりに、徹底抗戦にでて、マンションのすべての階を7階として刷り込ませたり、反対運動などを試みたりする。しかし、世間はバラ配りの際にも「転居の補償金を吊り上げようとしてやっているだけだろう」と一笑に付す。市は最終的に強制執行の手段をおわせ、日常業務の一環として今決断しないと転居先の分譲物件の紹介が難しくなるなど遠まわしの誘導を図る。

そして、町から7階が失われ、エレベータからは「7」の階数表示がなくなり、人々はずっとこの町に7階があったことすら忘れてしまったかのように暮らしを続けていく。

これは“フィクション”、つまり作り話である。三崎亜記の小説「七階闘争」の一部である。この小説のみそは、私たちが6階

も7階も8階も同列なものとして普段意識さえしないものを、7階にのみ特化して意識づけることにある。挿話される物語には、7階は8階や5階に遅れること200年近い歳月を費やされたとあり、特殊性と歴史性をもって浮かび上がる。結果、読み進めるとありうるリアリティを持つ。

「災害危険区域」というフィクション

東日本大震災後、津波浸水域で現地再建を退け、防災の観点から安全な内陸部へと集団移転を促すために「災害危険区域」の設定という手法が採られた。ただし、一度たりとも住民から要望されたものではなく、行政サイドから突然決められたことは、冒頭に挙げた7階撤去の出来事に酷似している。しかも、この区域設定がいかにも非現実的であることを示すデータがある。

震災における津波浸水域を日本全国にあてはめた場合、国土の10%にあたる約3万7,000km²の面積に総人口の35%にあたる4,438万人が居住する地域に相当することが国交省の分析で明らかになっている。これだけの人が再移住を将来的に求められる。

さらに、津波浸水のシミュレーションによって人の居住が危険だということで制限がかかっている、いわゆる「災害危険区域」に設定された範囲は1万3,000haに上り、皇居を含む山手線内側の約2倍

の面積に及ぶ土地が“住めない”国土である。この「災害危険区域」の設定を7階撤去のアナロジーでとらえるなら、7階に相当するのが浜辺である。それぐらい非現実的な世界をつくり出そうとしていることがわかる。

海辺の図書館の試み

一方で、「災害危険区域」というフィクションはある独自の世界をリアリティとして与えている。それを次に見てみよう。

仙台市に居住していた住民たちは、津波に流された自宅の現地再建を求めて「荒浜再生を願う会」を早期に立ち上げた。住民による抗議や運動にもかかわらず、現地再建は非現実としてすべて退けられた。いわば、「災害危険区域」は、私たちの都市機能から浜辺の文化を一掃して町そのものを廃墟にしてしまうフィクションである。しかし、継続的に浜辺に働きかけ続けた住民たちは、かつての自宅敷地に「里海荒浜ロッジ」を建てるなどしてそこを拠点に活動を展開してきた。その延長線上に、庄子隆弘さんが設計した「海辺の図書館」が開館した⁴¹。一見すると掘っ立て小屋の棚に本が一部並べてあるだけで図書館の既成概念からはおよそイメージがわからない。物質的な図書館という建物を廃墟に求めてもここでは意味をなさない。本の持つ空想的世界が人々の交流を通じて縦横無尽に繰り広げられているのである。居住できないからこ

そ立ち寄る場所として結節点となるのが図書館である。町の図書館は、たとえ本を読まなくても、それぞれの目的を持って余暇を過ごしたり、勉強したり、カフェで楽しんだりできる場所である。そのような思いの詰まった場所が「海辺の図書館」である。「里海荒浜ロッジ」^{図2}には、カフェのマスターが挽きたての珈琲を振る舞ってくれたり、津波に流された書物はそこにはないけれども、荒浜をよく知っている生き字引の語り部を通して、絵本を読むがごとく荒浜が語られたりする。また、外からやってきた支援者が知恵を絞りながら荒浜の未来を描こうとする。ここは図書館という建物を介せずとも、図書館を成立させている場所なのである。

図書館前にはバスが停車する。誰も住んでいないので、内陸部に入った所にバスの終着点があるが、ここに偽停車場が設けられている^{図3}。これを作成した佐竹真紀子さんは偽という言葉「人の為す」



図1 「災害危険区域」に指定された仙台市荒浜に「海辺の図書館」を開設した庄子隆弘さん。



図2 「里海荒浜ロッジ」にはお茶を飲めたり、語り部と交流する場がある。

という意味で人々の営みとして深くとらえ返す。車窓から見える風景は、震災前窓越しに見えた荒浜の家々が連なった街並みや人々の営みである。

幽霊のでる渚

本来存在しないが見えるといった虚実交えたものは、建物や生きている人だけではない。死んでいる人も「廃墟」となっている浜辺に登場する。幽霊との邂逅である。

各所で見られた幽霊現象のいずれのケースも、幽霊の出現を恐れたり、怨念を持った幽霊のイメージを覆して、当初は怖がっていた人々が温かくそれを迎えている（『呼び覚まされる霊性の震災学』）。

もともと渚や浜辺は、生者と死者の境界領域に属し、曖昧な領域にある不安定な生と死を引き離そうとはしない。むしろ、曖昧なものを曖昧なままにして生と死の中間領域を豊かなものとして肯定的にと



図3 「人の為す」という意味の偽停車場で人々の思いはここ荒浜で乗降する。

らえることで対処する方法を当事者は考えている。

葬儀などの儀式では、死者を生者側がこの世から切り離し、あの世に移行させ、安定化を図る。この延長線上で一般的に幽霊は、死後に肉体を離脱した靈魂であり、いまだ成仏しえないためこの世に姿を現すととらえられてきた。しかし、被災地で目撃される幽霊は、忌避されて二度と出てくるととらえられるのではなく、例えば、タクシー運転手などが再び現れたとしても温かく迎え入れると幽霊との邂逅を受容しているように、当事者が「生ける死者」とゆっくり向き合い見送るための深い付き合いを示しているといえる。

以上、どうやら新しいものをつくり出すことでもなく、かといって古いものを復旧することでもなく、見えないもののなかにある、新旧ではとらえられない何か、現在の復興や建築には求められているのではないだろうか。

参考文献

- *A 三崎亜記「七階闘争」（『廃墟建築士』集英社、2009所収）
- *B 金菱清編「呼び覚まされる霊性の震災学」（新曜社、2016）